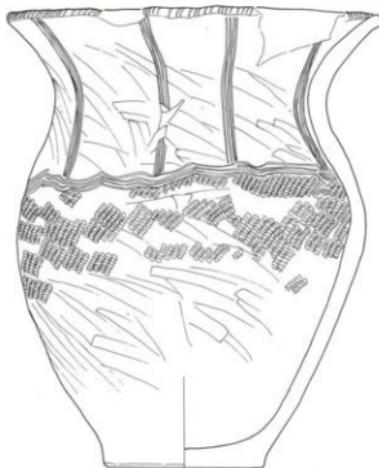


茨城県稻敷市  
下ノ内遺跡発掘調査報告書



平成18年3月  
稻敷市教育委員会  
有限会社 伸東興業  
有限会社 日考研茨城

茨城県稲敷市  
**下ノ内遺跡発掘調査報告書**

平成18年3月  
稲敷市教育委員会  
有限会社 伸東興業  
有限会社 日考研茨城

## 序 文

稲敷市は平成17年3月22日に、江戸崎町・新利根町・桜川村・東町の4町村が合併しました。霞ヶ浦の南岸に位置し、南を利根川が流れる水辺環境に恵まれた地域的共通性を持っており、広域的、歴史的にも深いつながりがあります。

稲敷台地には、平地林などの山林が多く残されていますが、一部開発が進められているところもあります。

このたび報告されましたのは、(有)伸東興業が日考研茨城に委託して調査いたしました下ノ内遺跡の発掘調査です。

下ノ内遺跡は三方を谷津に囲まれた、標高26、6m前後の舌状台地上にある集落跡です。時代は弥生時代、古墳時代中・後期のものと思われます。この場所は根崎遺跡の南西側の台地上にあり、開発に伴う事前調査により発見されました。

遺跡の話題が盛んに報道される今日、人々の歴史への関心は高まりつつあるものを感じています。

歴史や文化財によりいっそうの理解と関心をもっていただくための一助として、本書が広く活用されることを念願いたします。

あとになりましたが、本書が稲敷市の貴重な文化財資料として刊行に至ることができましたのも、関係各位の御協力によるものと存じています。心から感謝申し上げます。

平成18年3月

稲敷市教育委員会  
教育長 田中弘一

## 例　　言

1. 本書は、有限会社伸東興業（代表取締役新井美佐子）による山砂採取事業に伴い、開発行為前の事前調査として実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。  
本調査　茨城県稲敷市蒲ヶ山字根崎1148-3に所在する下ノ内(しものうち)遺跡である。
3. 調査は有限会社伸東興業の委託を受けて、茨城県教育委員会および稲敷市教育委員会の指導のもとに、有限会社日考研茨城が下記の期間に実施した。  
平成17年10月17日～平成17年11月4日（本調査）  
平成18年1月20日～平成18年3月20日（整理作業）
4. 発掘調査組織は下記の通りである。  
調査担当者 小川和博（日本考古学協会員 徒日考研茨城）  
整理作業は、稲敷市教育委員会の指導のもと、小川和博 大渕淳志 遠藤啓子 大沢由紀子  
大野美佳 小川知美（徒日考研茨城）が行った。
5. 本書の編集は、小川和博が行った。
6. 本書に使用した地形図は下記のとおりである。  
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図（江戸崎）  
第2図 稲敷市役所発行 1/2,500地形図
7. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
8. 本書中の色調に関する表現は新版標準土色帖（農林水産技術会議事務局監修2000年版）に従った。
9. 遺構土層図（セクション）・横断面図（エレベーション）の左上に記載した数値は標高を表示している。また遺構の規模については現遺構確認面から底面までの高さを計測した数値を表示している。
10. 遺構・遺物の写真撮影は小川和博が行った。
11. 記録および出土遺物は、稲敷市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査および本報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。（敬称略・順不同）  
茨城県教育委員会、玉里村立史料館、鈴木美治、小玉秀成、赤井博之
13. 発掘調査には以下の者が参加した。  
石黒 勇 飯田陽子 池田省三 海老原龍生 海老原琴 海老原和子 小野 豊  
大沢由紀子 小野寺勝美 大久保敦子 川村正義 金藤サト 斎藤芳志郎 佐賀 刚  
下山豊二 霽久保三郎 友部政夫 中島秀雄 中島トミ子 中島貞夫 中野富美子  
中村 薫 平林敬子 森永俊子 谷中昌
14. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。  
住居跡：S I 土坑：SK 柱穴：P 挿乱：K

## 本文目次

### 序 文

### 例 言

第Ⅰ章 序章 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過とその概要 .....	1
第3節 調査日誌 .....	1
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡 .....	2
1 遺跡の位置 .....	2
2 周辺の遺跡 .....	2
第Ⅱ章 下ノ内遺跡の調査 .....	7
第1節 調査の概要 .....	7
第2節 発見された遺構と遺物 .....	7
第1項 住居跡 .....	7
1) 住居跡SI01 .....	7
2) 住居跡SI02 .....	10
3) 住居跡SI03 .....	13
第2項 土坑 .....	18
1) 土坑SK01 .....	18
2) 土坑SK02 .....	18
3) 土坑SK03 .....	18
4) 土坑SK04 .....	18
第Ⅲ章 まとめ .....	20
付章 遺物観察表 .....	23

## 挿図目次

- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1 : 25000)
- 第2図 下の内遺跡の周辺地形図 (1 : 2500)
- 第3図 下の内遺跡遺構配置図
- 第4図 住居跡SI01実測図
- 第5図 住居跡SI01カマド実測図
- 第6図 住居跡SI01出土遺物
- 第7図 住居跡SI02実測図 (1)
- 第8図 住居跡SI02実測図 (2)
- 第9図 住居跡SI02実測図 (3)
- 第10図 住居跡SI02出土遺物 (1)
- 第11図 住居跡SI02出土遺物 (2)
- 第12図 住居跡SI03実測図
- 第13図 住居跡SI03出土遺物
- 第14図 土坑SK01、02、03、04実測図及びSK01出土遺物
- 第15図 「下ノ内式」土器の施文順序と文様割付
- 第16図 住居跡S I 02出土堆形土器法量

## 写真図版目次

- PL 1 下ノ内遺跡遠景 下ノ内遺跡調査前 下ノ内遺跡全景
- PL 2 住居跡SI01全景 住居跡SI01カマド 住居跡SI01遺物出土状況
- PL 3 住居跡SI02全景 住居跡SI02遺物出土状況 住居跡SI02貯藏穴 1
- PL 4 住居跡SI02貯藏穴 2 住居跡SI03全景 住居跡SI03遺物出土状況
- PL 5 土坑SK01全景 土坑SK02全景 土坑SK03全景 土坑SK04全景
- PL 6 住居跡SI01出土遺物 住居跡SI02出土遺物
- PL 7 住居跡SI02出土遺物
- PL 8 住居跡SI02出土遺物 住居跡SI03出土遺物 土坑SK01出土遺物

## 表目次

- T ab. 1 下ノ内遺跡と周辺遺跡一覧表
- T ab. 2 柱穴計測値
- T ab. 3 柱穴計測値
- T ab. 4 柱穴計測値
- T ab. 5 住居跡S I 02出土堆形土器法量

# 第I章 序 章

## 第1節 調査に至る経緯

平成16年6月、(有)津東興業より福井市浦ヶ山字下ノ内1148番1他17筆、における埋蔵文化財の所在の有無について照会があった。山砂採取として36367.07m<sup>3</sup>を開発するといった内容であった。

近くからは最近、地続きである根崎遺跡が平成16年7月に発見されている。この場所は地図は畑になっていたが、現況は山林であり浦ヶ山字下ノ内1148番3の試掘調査を平成17年3月に実施した。

その結果、古墳時代の堅穴住居跡3軒、土坑2基が確認され、古墳時代の土師器片が出上している。

教育委員会と事業主、開発業者との間で話し合いが行われ、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を実施することで合意し、1,200m<sup>3</sup>の発掘調査が平成17年10月17日～平成17年11月4日に実施された。

(福井市教育委員会)

## 第2節 調査経過とその概要

下ノ内遺跡の本調査は、平成17年10月17日から11月4日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発予定部分にあたる1,200m<sup>3</sup>を調査することができた。

降雨により予定していた10月17日から開始できなかったものの、週末の21日から重機による表土除去、遺構確認を行った。当初試掘調査後における調査区内の削平により遺構調査が十分に実施できるかどうか懸念された。確かに表土層除去段階では確認調査で検出された遺構は全く把握できず、わずかに残存していた黒色土のシミの拡がりを手掛かりに、人力による丁寧な精査しかないと判断し、時間をかけて表土精査を何段階にも亘って繰り返し進めた。その結果まず南東側に土器の小破片が集中する黒色土を確認する。これを1号住居跡（S101）と命名する。しかし、明確な範囲を把握するにはさらに時間が必要であった。続いて北西側に拡がる黒色土の調査を実施する。わずかではあったが、住居跡の輪郭と思われるコーナーが確認された。それを手掛かりに精査を行った結果、一軒の住居跡が初めて明らかにでき、2号住居跡（S102）と命名する。最後調査区南側の規模の小さな黒色土を精査する。そこに3軒目の住居跡が現われた。きっかけとなったのはほぼ完形の斐形土器の出土であった。土器の周辺を細かく精査すると跡と思われる焼土層が確認され、つづいて表面の一部が検出され、住居跡の範囲をかろうじて確定できた。これを3号住居跡（S103）と命名する。さらに住居跡群の周囲を精査していくと土坑の存在が明らかになった。最終的には4基の土坑を検出し、調査を終了する。

(小川和博)

## 第3節 調査日誌

2005年10月17日～11月4日

10月17日～20日 降雨の為作業中止

10月21日 本日より調査を開始する。重機により表土層除去を東側から南側にかけて実施する。遺跡の破壊が著しく遺構の確認は困難であった。なお東端付近から焼土を検出する。

10月22日 重機による表土層除去を継続する。調査区西側を集中して実施する。遺跡破壊の著しい地点であり、表土層除去段階でも搅乱が明瞭に把握できた。なお北東端部で黒色土の落込みを確認する。降雨の為午前中に作業を中止するが、表土層除去は完了する。

10月24日 本日より遺構確認の為の精査を開始する。2ヶ所の落込み（褐色もしくは黒色土）を検出するが、住居跡の範囲を確認できない。西側擾乱部精査を行う。

10月25日 遺構確認調査を継続する。西側住居跡を2号住居跡（S102）と命名する。北東側のカマドのある住居

跡を1号住居跡（SI01）と命名する。西側住居跡の確認精査を集中的に行う。搅乱が著しく、遺構の検出は困難であった。

10月26日 遺構確認精査を継続する。1号住居跡（SI01）を精査するが検出は困難であった。2号住居跡（SI02）を精査し、北東側コーナーを確認し、これらを手掛かりに平面プランを確定する。

10月27日 降雨の為作業を中止する。

10月28日 住居跡の調査継続。1号住居跡（SI01）遺構精査し、セクションベルトを設定後、床土除去に取り掛かる。2号住居跡（SI02）セクションベルトを設定し、床上除去を行い床面、周溝、柱穴を検出する。床面上より遺物が出土する。（石製模造品、高壠、壇、甕、坏等）がまとまって出土した。

10月29日 2号住居跡（SI02）セクションベルト清掃、セクション実測、貯蔵穴調査。1号住居跡（SI01）セクションベルト清掃、セクション実測。

10月31日 1号住居跡（SI01）セクションベルトを除きカマド床面、周溝を検出。セクション実測。2号住居跡（SI02）のセクションベルト除去し、壁溝、柱穴、貯蔵穴を精査し完掘する。全景写真撮影。

11月2日 1号住居跡（SI01）セクションベルトを除去し完掘する。全景写真撮影後カマド調査。2号住居跡（SI02）遺物取り上げ作業。3号住居跡（SI03）精査し、壁溝、柱穴、炉跡検出する。1号土坑（SK01）セクションを除き床面まで調査する。つづいて2号、3号、4号土坑を調査する。

11月4日 1号住居跡（SI01）掘形周溝調査。2号住居跡（SI02）掘形調査。3号住居跡（SI03）平面実測、全景写真撮影、掘形調査。1号土坑（SK01）完掘し、全景写真撮影。全測図作成、全景写真撮影後、本日にて調査を完了する。

（小川和博）

## 第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

### 1. 遺跡の位置（第1・2図）

下ノ内遺跡は、北緯35° 57' 7"、東経140° 17' 9" の茨城県南端、稲敷市蒲ヶ山字下ノ内1148-3他に所在し、旧江戸崎町の市街地から西に3.5kmに位置する。ここは常総台地北東部に相当し、通称稻敷台地上にあたる。付近は南側が龍ヶ崎市と境する1級河川小野川や桂川、乙戸川をはじめその支流によって侵食され複雑な地形を呈しているが、ここも外見上長靴状の支台が南東にある霞ヶ浦方向に向かって延びている。なお遺跡は小野川の反対側で、やはり小野川の支流にあたる沼里川によって開析された比較的幅狭い支谷に面し、ここからさらに南西に延びる支谷のわずか200m奥まった標高26mの台地上に立地している。ここは浅い谷形成であるが、沼里川からはわずか250m谷奥へ入り込むだけであり、沼里支谷に直に接していると見た方が理解しやすい。

また本遺跡は、北東に突出した舌状台地の南東端で、南側が急傾斜し、西側と北側は浅い谷頭が入り、北西側は緩傾斜して低地部に至る。全体的に平坦部は少なくちょうど丘状の頂部に立地する。現水田との比高差は15mを測る。調査前の現況は畑であった。

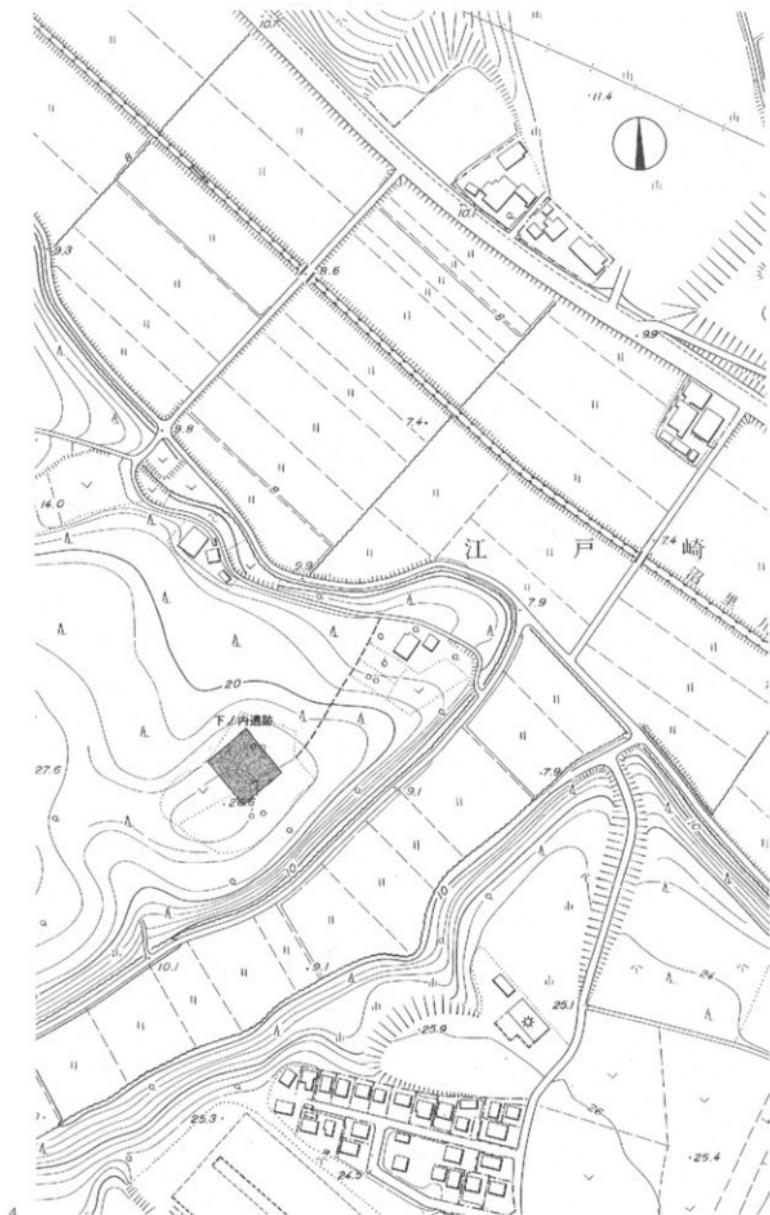
なお、本遺跡の北東100m先の低段丘上には古墳時代の集落である根崎遺跡が位置する。現況は山砂採取により台地が分断されているが、本来は地続きであり、同一遺跡と推定される。

### 2. 周辺の遺跡（第1図）

現在旧江戸崎町で周知されている遺跡は164ヶ所である。10年前まで52ヶ所といわれていたものが3倍以上所在することが確認されている。この数字は調査が進めばさらに増えることは間違いない。事実今回の「下ノ内遺跡」や前回実施した「根崎遺跡」は開発行為が申請されてから試掘調査の結果、遺跡であることが判明したものである。なお、周辺には明治時代より知られた著名な遺跡が多く、とくに縄文時代の貝塚については学史的にみても特筆されるものがある。「椎塚貝塚(024)」「小松川貝塚(020)」「センゲン貝塚(033=津瀬)」「村田貝塚(06)」等は戦後に



1647年「内道開」  
039木植地宿  
010櫻坂宿  
014神田真喜宿  
015合浦の邊宿  
030須ヶ原宿  
038大日寺  
039羽庭城  
041大日寺古墳  
043大日寺  
044印旛宿  
045吉川宿  
046市川宿  
047佐倉宿  
048葛西宿  
049葛西宿  
050葛西宿  
051葛西宿  
052葛西宿  
053葛西宿  
054葛西宿  
055葛西宿  
056葛西宿  
057葛西宿  
058葛西宿  
059葛西宿  
060葛西宿  
061葛西宿  
062葛西宿  
063葛西宿  
064葛西宿  
065葛西宿  
066葛西宿  
067葛西宿  
068葛西宿  
069葛西宿  
070葛西宿  
071葛西宿  
072葛西宿  
073葛西宿  
074葛西宿  
075葛西宿  
076葛西宿  
077葛西宿  
078葛西宿  
079葛西宿  
080葛西宿  
081葛西宿  
082葛西宿  
083葛西宿  
084葛西宿  
085葛西宿  
086葛西宿  
087葛西宿  
088葛西宿  
089葛西宿  
090葛西宿  
091葛西宿  
092葛西宿  
093葛西宿  
094葛西宿  
095葛西宿  
096葛西宿  
097中正道宿  
113L葛西宿  
126L葛西宿  
127L葛西宿  
128L葛西宿  
129L葛西宿  
130L葛西宿  
131L葛西宿



なっても慶應大学や早稲田大学で学術調査されているものがある。

さて、下ノ内遺跡が立地する小野川および沼尾川に挟まれた福敷台地の支台である奥原台地上には縄文時代から近世に至るまでの多くの遺跡が確認されているが、とくに縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡が集中している。しかし、実態は発掘調査が行われている遺跡は平成3年に実施された「土戸古墳(046)」と昨年調査した「根崎遺跡(162)」以外はなく、いずれも先に実施された分布調査の成果によるものである。まず旧石器時代は少なく、立地する台地が異なるが平成4年にゴルフ場造成に先行して調査された「秋平遺跡(056)」でナイフ形石器が出土している。なお「根崎遺跡」ではガラス質黑色安山岩製の石核が検出されている。

次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺でも「神田道具塚(014)」「蒲ヶ山貝塚(030)」をはじめ、「後谷遺跡(083)」「原内遺跡(085)」「土戸平遺跡(086)」が知られ、「根崎遺跡(162)」では早期・井草式湖から前期終末までの遺物が出土している。またあいにくここでは図示できないが、縄文時代中期の貝塚である「田村貝塚(006)」も同台地上に立地している。

弥生時代は極端に少なくなる。旧町内でも10ヶ所が知られているのみで、集落跡でも盾の台古墳群(022)、大日山古墳群(051)、思川遺跡(053)、秋平遺跡(056)が調査されたに過ぎない。周囲でも「立通し遺跡(088)」が対峙する台地上に立地するのみである。しかし、今回本遺跡では住居跡が検出され、また遺物だけであるが「根崎遺跡(162)」でも後期の土器が出土している。

古墳時代になると古墳をはじめ、集落跡も數多く報告されている。周辺でも第2図に示した分布図内で半分以上の28ヶ所が所在する。隣接する「根崎遺跡(162)」でも検出された6軒の住居跡すべてが古墳時代に属する。とくに中期から後期にかけての集落跡である。これは本遺跡でも確認されており、両遺跡間における親密な関連性が指摘される。また古墳では平成3年に調査された「土戸古墳(046)」のほか、「大日古墳(038)」「大日峯古墳(041)」「山王古墳(042)」「大塚古墳(043)」「沼口古墳群(044)」「東前古墳群(047)」「辺田台古墳(048)」が所在する。

次ぎの奈良・平安時代の遺跡としては同台地の南端に位置する「下君山廬寺(012)」がある。布目瓦が多量に出土し、塔の心礎と想定される平石の存在が明らかにされている。しかも8世紀代の金剛仏の出土も報告されており、「信太郡」の都衙の推定地として明治時代より指摘されている。また昭和63年に県道新川江戸崎線の道路改良工事に伴い調査された「二の宮貝塚(032)」および「思川遺跡(053)」では集落内から土師器・須恵器のほか、灰釉陶器の平瓶、把手付瓶、綠釉陶器の輪花、さらに唐鏡(端花双鳳鏡)の破片の出土が報告されている。これらを総合的にみるとこの地が霞ヶ浦の肥沃な土地を背景に、政治的にも中心的な機能をもたらしていたことは疑いない。

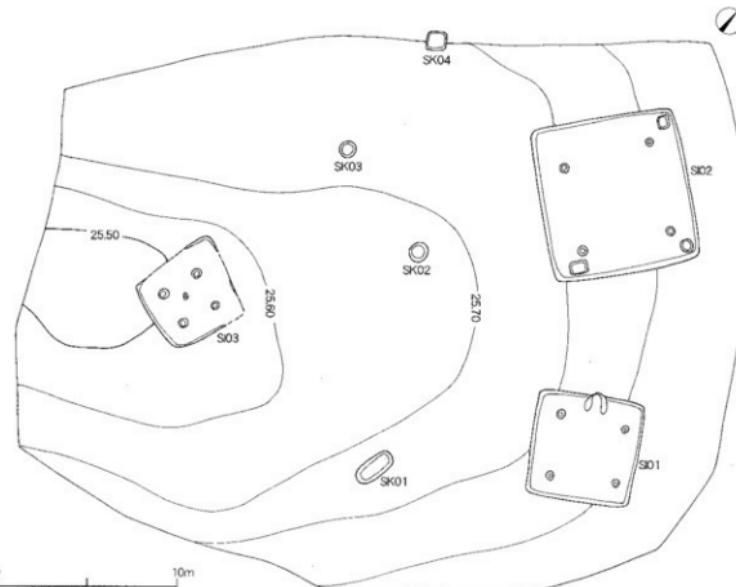
(小川和博)

#### 参考文献

- 西村正衛1981「茨城県江戸崎町田村貝塚(第一次調査)
- 鈴木美治1991「二の宮貝塚・大日山古墳・思川遺跡—一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財團文化財報告第65集
- 茨城県立歴史館1994「学術調査報告書、4. 茨城における古代瓦の研究」
- 茨城県1995「茨城県・考古資料編・奈良平安時代」
- 大賀 健他1999「秋平遺跡・池平遺跡・中佐倉貝塚」江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会

Tab. 1 下ノ内遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	遺物	備考	番号	遺跡名	種別	遺物	備考
164	下ノ内遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳		085	熊内遺跡	包蔵地	縄文・奈平・中世	
008	荒地古墳	古墳	古墳		086	戸戸平遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
009	木綿塙古墳群	古墳群	古墳		087	赤羽根遺跡	包蔵地	縄文・古墳	
010	大畠古墳	古墳	古墳		088	立道り遺跡	包蔵地	縄文・弥生	
014	神山通真跡	包蔵地・瓦砾	縄文		089	二重垣遺跡	防壁	中世	
015	白幡前遺跡	包蔵地・古墳	古墳・奈平・中世		090	赤羽根塙	塚	近世	
030	渡々山貝塙	包蔵地	縄文		091	原久保遺跡	包蔵地	古墳	
038	大日古墳	古墳	古墳		092	時松平遺跡	包蔵地・貝塙	古墳	
039	羽野城跡	城郭跡			093	菅後遺跡	包蔵地	古墳	
041	大字峯古墳	古墳	古墳		094	沼田庚申塙	塚	近東	
042	山王古墳	古墳	古墳		095	神明千葉塙	包蔵地	古墳	
043	太母古墳	古墳	古墳	西漢	096	草木遺跡	包蔵地・古墳群	弥生・古墳・奈平	
044	田口古墳群	古墳群	古墳		097	中通遺跡	包蔵地	縄文・古墳・奈平・中世	
046	土戸古墳	古墳・集落	縄文・古墳・奈平	1991年調査・発掘	113	山被遺跡	防壁	中世	
047	東前古墳群	古墳群	古墳		114	高野遺跡	墓地	中世	
048	辺衛合古墳	古墳	古墳		115	戸内平遺跡	古墳	古墳	
074	八幡台遺跡	包蔵地	縄文		116	鶴前村遺跡	包蔵地	奈平・中世	
075	大竹遺跡	包蔵地	縄文・古墳		117	池台遺跡	包蔵地	縄文・奈平・中世	
076	竪野遺跡	包蔵地	縄文・古墳		126	原ノ前遺跡	包蔵地	奈平・近世	
077	芝ヶ谷塙跡	包蔵地	縄文・古墳		128	上若山廬山遺跡	包蔵地	奈平	
078	花折遺跡	包蔵地	縄文・古墳		129	中板台遺跡	古墳	奈平・奈平	
079	敷石塙	塚	近世		130	根吉ヤハ遺跡	包蔵地	縄文・奈平	
080	様子遺跡	包蔵地	古墳・奈平		131	根吉ヤハ塙	包蔵地	縄文・古墳・奈平	
081	辺平塙跡	包蔵地	奈平		132	岡平遺跡	包蔵地	奈平	
082	中部塙跡	包蔵地	縄文・中世		133	和田遺跡	包蔵地	奈平	
083	後谷遺跡	包蔵地	縄文・古墳		162	根岸遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	2005年調査
084	上ヲモ子塙	塚	近世						



## 第II章 下ノ内遺跡の調査

### 第1節 調査の概要 (第3図)

本調査は、確認調査の成果を基づき開発予定地全面が対象となった。しかし、確認調査で検出されたすべての遺構が大きく擾乱を受け、十分な調査が可能か懸念されながら実施した。しかし、幸いにも遺構の遺存状態は予想よりもはるかに良く、調査の結果縄文時代の土坑1基、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代の住居跡2軒、近世以降の土坑3基が検出された。これらはいずれも重複することなくやや間隔を置いて存在していた。また縄文土坑と弥生・古墳時代の住居跡から遺物の出土があった。まず縄文土坑SK01から前期の土器片が出土し、弥生時代の住居跡SI03からはほぼ完形に近い菱形土器が床面上より出土した。覆土の遺存も決して良好ではなかったにもかかわらず、新たなタイプの土器の出土は運が良かったとしかいいようがない。また古墳時代でも充実している。中期前半とした住居跡SI02からは塔や高壙、石製模造品や土玉など比較的まとまった資料を提出している。さらに後期の住居跡SI01でも須恵器・鶴をはじめ、滑石製紡錘車の未製品の出土がある。

### 第2節 発見された遺構と遺物

#### 第1項 住居跡

##### 1) 住居跡SI01 (第4~6図)

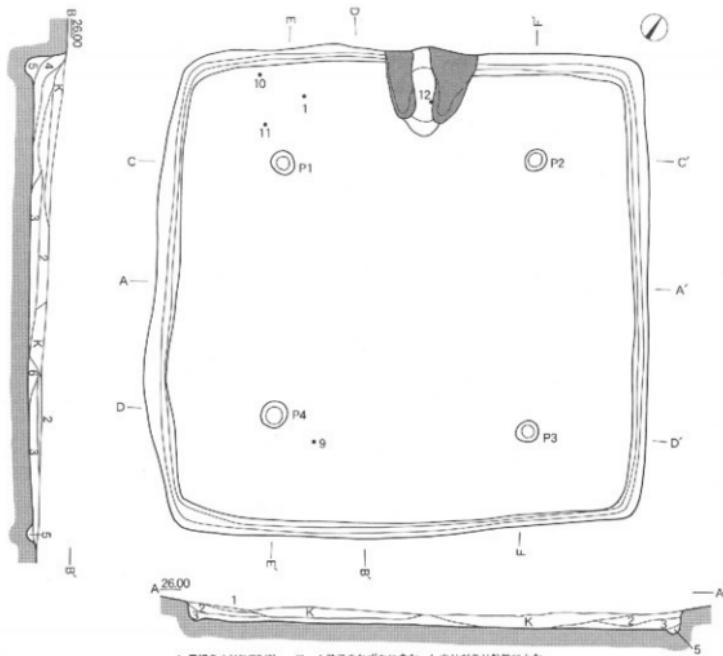
調査区の東側で検出された。住居中央部が大きく擾乱を受けているが、範囲は明確に把握できた。規模は中心軸で東西6.04m、南北5.96m、深さ0.09~0.39mで、平面形は方形を呈している。主軸は北壁中央にカマドが設置しており、傾きはN-34°-Wを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘形底面までを対象とした。床面中央から大きく擾乱され残存する部分は住居の周囲のみであるが、遺存している床面はほぼ平坦で、ローム粒・ブロックを混入した黄褐色土を1~5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。貼床は、カマド前面から住居の中央部が顯著であったが、擾乱を受けた部分を除き全面硬化面が確認できる。壁溝はカマド部分を除き全周する。規模は上面幅で0.12~0.31m、深さ0.01~0.10mの横断面U字状を呈する。主柱穴は4本で住居対角線上に設けている。以下検出された柱穴を計測値である。

Tab. 2 柱穴計測値 (cm)

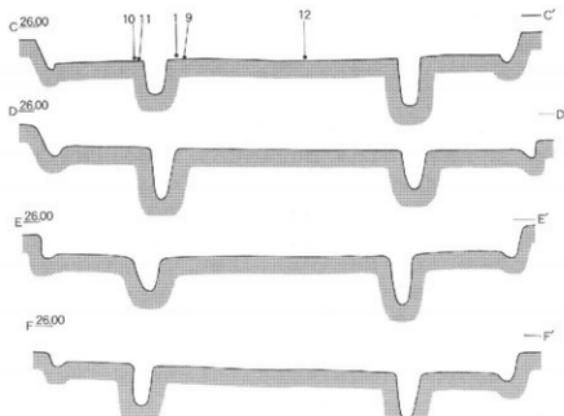
	長径	短径	深さ		長径	短径	深さ		長径	短径	深さ				
P 1	3 1	2 5	4 0	P 2	2 7	2 5	5 8	P 3	2 7	2 4	5 0	P 4	3 4	3 1	6 4

本跡中央部が大きく擾乱を受けており、覆土は住居周縁のみで残存しており、6層が分層可能である。1層黒褐色土は上層を覆い、ローム粒をわずかに含み、締りと粘性にとむ。2層褐色土も覆土上層で、ローム粒を多く含み、締りがあり、粘性にとんでいる。床面に堆積する3層暗褐色土は、ローム粒子を多く含み、締りがあり、粘性にとむ。4層にぶい黄褐色土は壁際を覆い、ローム粒を多量に含み、締りがあり、粘性にとんでいる。壁溝中に堆積している5層黄褐色土は、ローム粒を多量に含み、締りがあり堅緻である。6層床面中央に堆積した焼土粒を多量に含む明赤褐色土は、やや締りに欠け、粘性に欠ける。1~6層は、少なくとも自然堆積の状態を示していた。

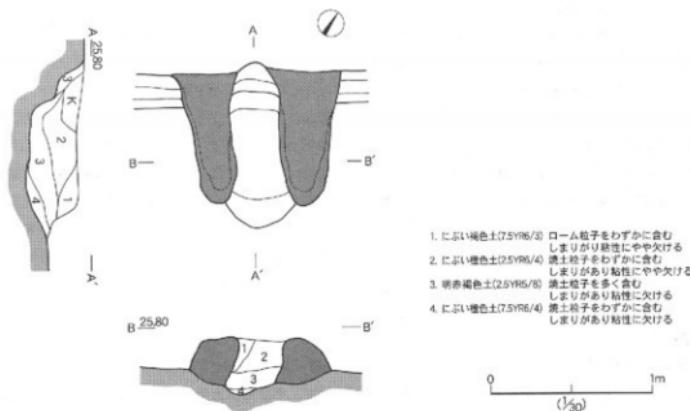
カマドは北壁のほぼ中央に設置してある。北壁を半円形状に5cmほど奥に掘り込み煙道部とし、規模は焚口部から煙道部までの長さ99cm、両袖間の最大幅91cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。火床部は長径83cm、短径52cmの楕円形で、深さ12cmほど底部に掘り窪めており、底部は被熱赤化していた。カマド覆土は4層に分層され、1・2層は崩落土。3層は焼土粒子を多量に含む明赤褐色土。4層は焚口部に堆積したにぶい橙色土である。



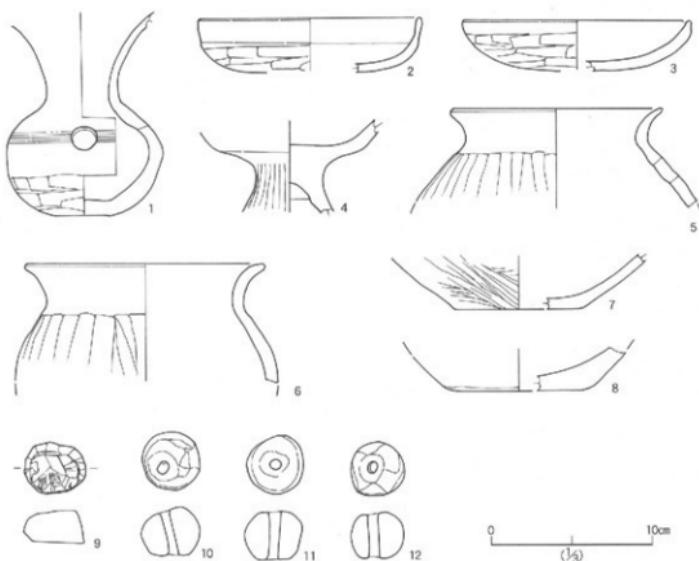
1. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒子をわずかに含む しまりがあり粘性にとむ  
2. 褐褐色土(10YR4/4) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性にとむ  
3. 暗褐色土(10Y3/3) ローム粒子を多く含む しまりがあり粘性にとむ  
4. こぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム粒子を多量に含む しまりがあり粘性にとむ  
5. 黄褐色土(10Y5/6) ローム粒子を多量に含む しまりがあり粘性にとむ  
6. 水赤褐色土(25YR5/6) 粘土粒子を多く含む しまりにやや欠ける粘性に欠ける



第4図 住居跡S101実測図



第5図 住居跡S I 01カマド実測図



第6図 住居跡S I 01出土遺物

遺物は須恵器、土師器と石製品として滑石製紡錘車の未製品、土製品である土玉で、いずれも床面上もしくは直上から出土した。須恵器1は壺で、カマド西脇の床面上から検出されたもので、口縁部の上半部が欠損しているものの、胴部は完存している。底部が丸味をもち体部は扁平球形を呈し、綺まりのある頸部から外上方へ開く口頭部を有する。体部中央に円孔をあけ、円孔上部に櫛歯状文を周回させる。6世紀中葉。土師器は壺、高壺、甕がある。壺は2点図示した。2は丸底で、体部は内湾し、口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。3は体部が内湾して開き、口縁部は短く垂直気味に立ち上がる。4は高壺である。壺部下半部の破片で、脚部は接合部から下方に向かって開いている。5~8は甕である。5は体部が球形を呈し、口縁部はくの字状に外反する。6は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。9は滑石製の紡錘車未製品である。荒削段階から形削段階を経て切削段階の製品であろう。上面径2.981×3.550cm、下面径2.554×2.843cm、高さ1.828cm、重さ36.10gを測る。10~12は球形の土玉で、作りは比較的丁寧で、10・11は孔部両面に面取り成形を施している。古墳時代後期・6世紀後半から7世紀前葉に比定される。

## 2) 住居跡SI02 (第7~11図)

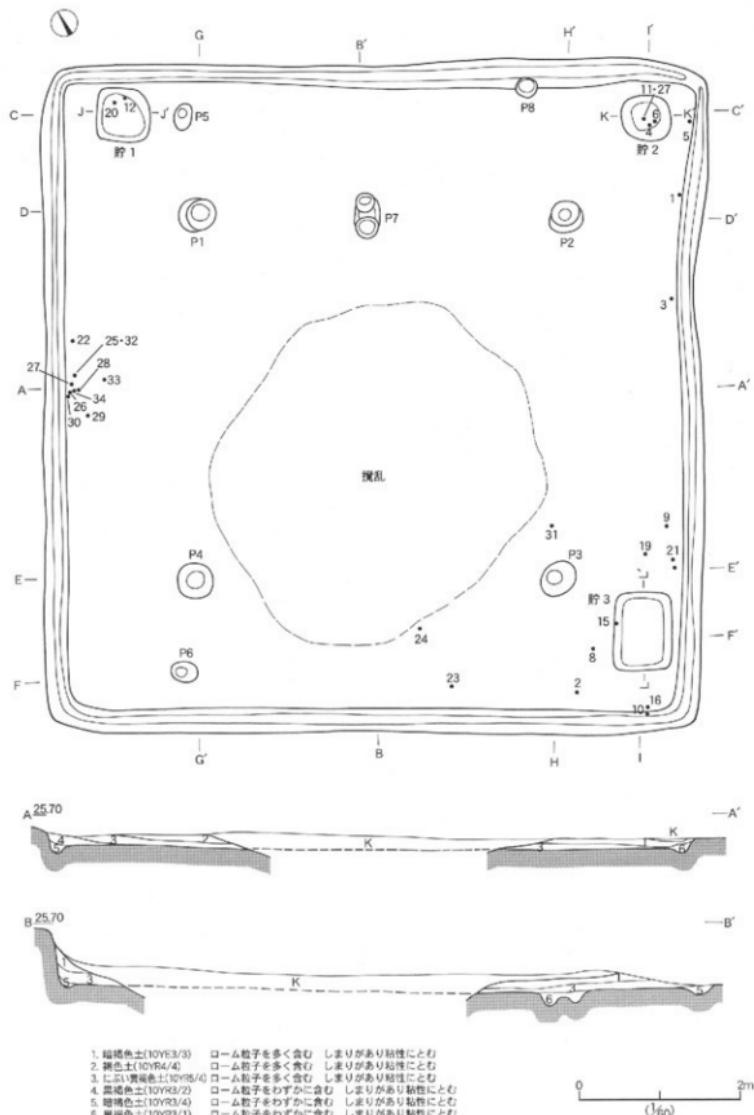
調査区の北隅で検出された。SI01と同様に住居中央部が大きく搅乱を受けていたが、範囲は明確に把握できた。規模は中心軸で東西8.14m、南北8.20m、深さ0.10~0.38mで、平面形は方形を呈しており、やや大型住居跡の部類に入る。主軸は炉跡等が搅乱により検出されていないが、北方向の傾きはN-38°-Eを指す。調査は、まず住居の使用面までとし、最終的に掘溝底面までを対象とした。やはり床面中央が大きく搅乱され残存する部分は住居の周囲のみであるが、遺存している床面はほぼ平坦で、ローム粒・ロームブロックを混入した黄褐色土を1~5cmの厚さに敷きつめ、貼床をしていた。貼床は、住居の北隅・北西側・南西側で顯著であった。壁溝は西隅の貯蔵穴2付近で明瞭でない他はほぼ全周する。規模は上面幅で0.18~0.42m、深さ0.03~0.11mの横断面U字状を呈する。主柱穴は4本で住居対角線上に設けている。さらに付帯する柱穴が4本確認された。なお、主柱穴である北側柱穴と西側柱穴であるP1とP2が抜き取り状に開口が広がっていた。また主柱穴4本の柱根痕は検出されていない。支柱としてP1とP2の中間部に2本重複するP7が穿たれている。また北貯蔵穴1の東側と対峙する西柱穴P4の西側にそれぞれ1本ずつ(P5, P6)が穿たれている。さらに北壁溝に接して東側にも小柱穴が穿たれている(P8)。以下検出された柱穴を計測値である。

Tab. 3 柱穴計測値 (cm)

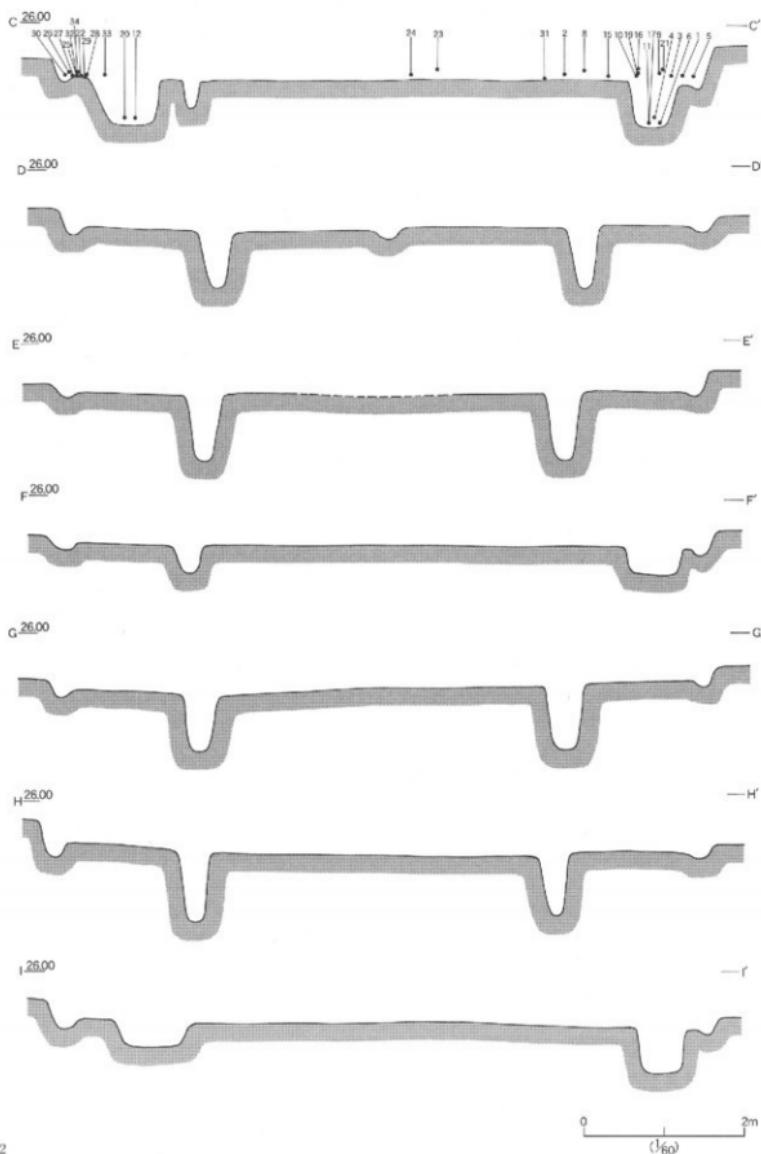
	長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ		長径×短径	深さ				
P1	4 6	4 0	6 7	P2	4 2	3 6	7 6	P3	4 6	3 8	8 5	P4	4 4	4 4	7 7
P5	3 4	2 0	3 3	P6	3 4	2 2	3 3	P7	5 4	3 2	1 7	P8	2 4	2 2	1 2

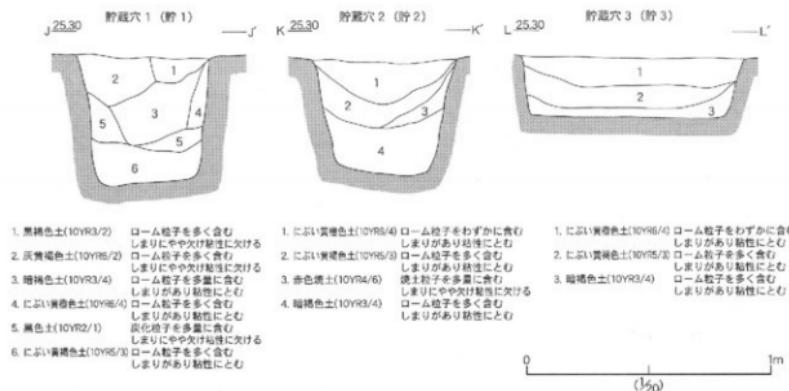
貯蔵穴が3ヶ所検出された。北隅、東隅、南隅に位置する。まず北貯蔵穴1の規模は南北66cm、東西66cm、深さ52cmを測り、平面形は不整方形を呈し、掘形はほぼ垂直気味に立ち上がる。覆土は6層に分層でき、自然堆積層である。覆土下層より高壺12と甕20が出土している。東貯蔵穴2の規模は南北56cm、東西66cm、深さ52cmを測り、平面形は略円形を呈し、掘形は垂直に立ち上る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。底面直上から壺4・6、高壺11と土器27が出土している。また南貯蔵穴3の規模は南北94cm、東西69cm、深さ25cmを測り、平面形は長方形を呈し、掘形はほぼ垂直気味に立ち上がり、上部で外方へ開く。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。覆土上面から高壺15が出土している。

本跡中央部が大きく搅乱を受けており、覆土は住居周縁のみで残存しており、6層が分層可能である。1層暗褐色土は上層を覆い、ローム粒を多く含め、締りと粘性にとむ。中層2層褐色土は、ローム粒を多く含み、締りがあり、粘性にとんでいる。床面に堆積する3層にぶい黄褐色土は、ローム粒子を多く含み、締りがあり、粘性にとむ。



第7図 住居跡S 102実測図(1)





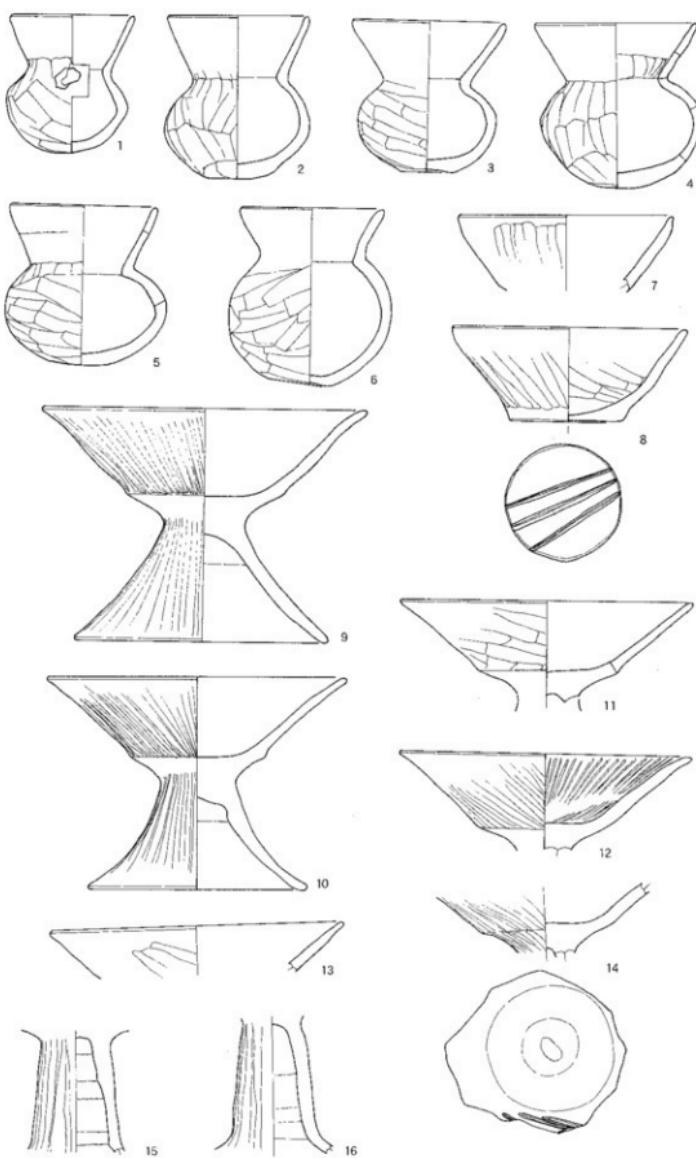
第9図 住居跡S-102実測図(3)

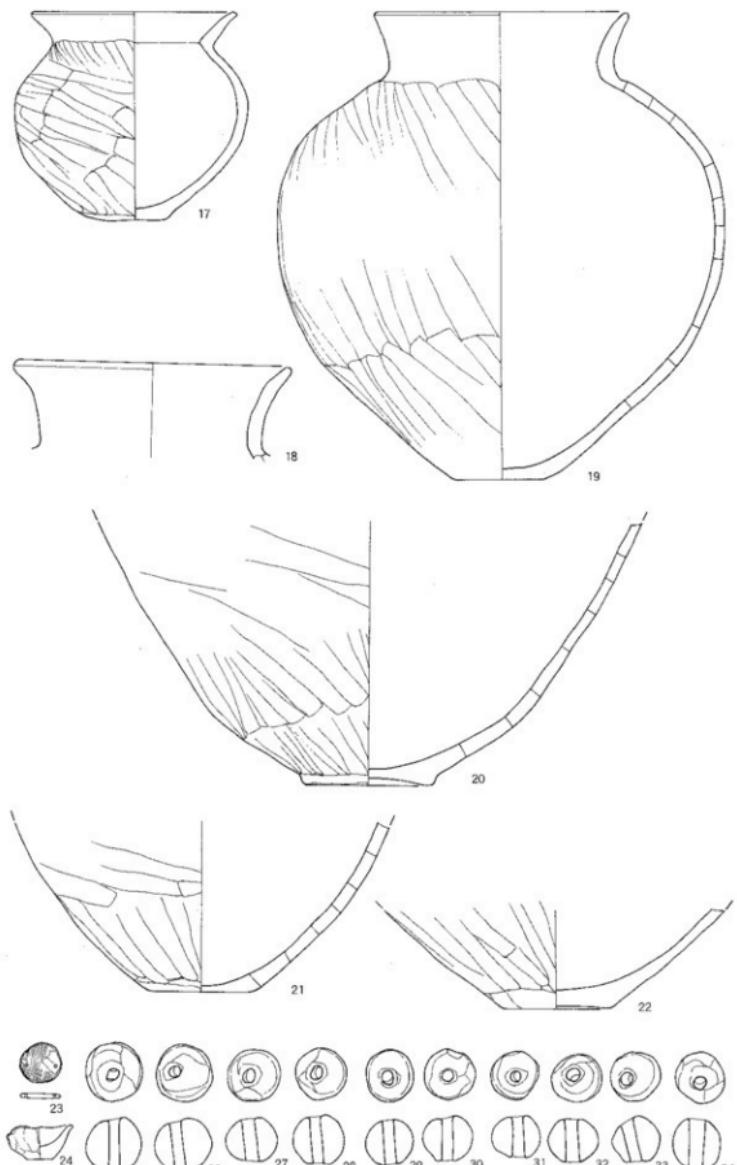
4層黒褐色土は壁際を覆い、ローム粒をわずかに含み、縮りがあり、粘性にとんでいる。壁溝中に堆積している5層暗褐色土は、わずかにローム粒を多く含み、縮りがあり堅緻である。6層黒褐色土は、わずかにローム粒を含み、縮りがあり堅緻である。1～6層は、少なくとも自然堆積の状態を示していた。

遺物は土師器、石製模造品である双孔円盤、土製品である土玉がある。3基の貯蔵穴内をはじめ、いずれも床面上もしくは床面直上から出土している。土師器は小形壺、鉢、高杯、甕がある。小形壺は7個体のうち、完形もしくは完形に近いものが6個体出土した。いずれも体部は球形もしくは扁平球形を呈し、口縁部は外傾して立ち上がり、器面調整も口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデの後、ヘラケズリを加えるものの、形態に若干の相違がみられる。壺1は小形で器高が8.5cmである。底部はヘラケズリによって平底状に成形している。壺2・3は明瞭な平底を呈し、とくに3は上げ底状に窪む。壺4・5の底部はヘラケズリにより丸底状に成形している。壺6は小形壺形で、比較的短い口縁部をもち、体部も胴長である。8は鉢である。体部の1/4ほどを欠損している。平底の底部から体部はやや内湾気味に外傾して立ち上がる。底部には3条の擦溝痕が認められる。転用砾石として利用されたものであろう。9～16は高杯である。9～14の杯部は外傾して立ち上がり、杯部外下位に稜を有し、9・10の脚部はラッパ状に開き、15・16はエンタシス状を呈する。なお14の杯部外側には擦溝痕が3条認められる。17～22は甕である。17はやや小形の甕で、口径12.6cm、器高12.0cmを測り、体部は扁平球形を呈し、口縁部はぐの字状に外反する。19の口径15.6cm、器高28.6cmを測り、体部はほぼ球形を呈し、口縁部はぐの字状に外反する。23は滑石製の双孔円盤である。南壁際の床面上より出土している。形態は略円形で、長さ2.30cm、幅2.51cm、厚さ0.222cm、重さ2.38gを測り、径0.174cmの2孔を有する。両面および側縁に仕上げ研磨が施されている。24は手握土器である。塊形を呈し、法量は口径4.2cm、器高2.1cm、底径1.6cmを測る。口縁端部は薄くシャープに外反し、底部は比較的分厚く、やや平底である。焼成は普通である。25～34は土玉である。ほぼ球形を呈し、作りは比較的丁寧である。古墳時代中期前半・5世紀前半に比定される。

### 3) 住居跡S-103 (第12・13図)

調査区の南西側で検出された。住居跡覆土の大半が擾乱を受けており、辛うじて床面と壁の一部が遺存していた。平面形は北壁辺が長く、南壁辺の短いや台形に近い方形を呈しており、規模は中心軸で東西4.42m、南北4.75m、





第11図 住居跡S I 02出土遺物 (2)

0 10cm  
(1g) 15

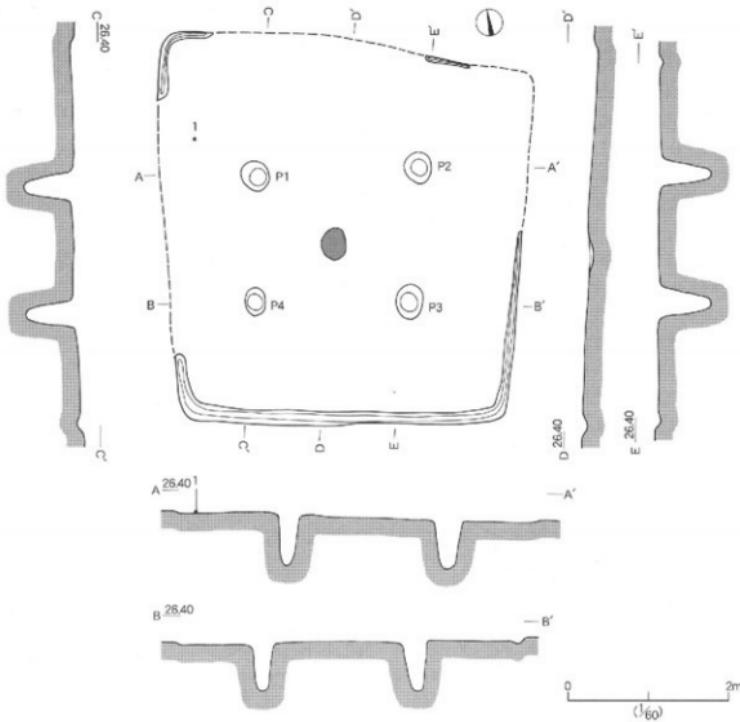
深さ3cmであった。また主軸は北壁を北辺に位置させるとN-19°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、貼床は確認できなかった。壁溝は南壁面と東壁面の南側および北東隅と北壁東寄りの一部で検出でき、確認できる上面幅で0.05~0.21m・深さ0.02~0.04mの規模を測る。なお、検出できる部分は攪乱をうけており、本来ならば全周するものと推定される。主柱穴は4本で住居対角線上に設けている。いずれも円形もしくは楕円形を呈し、以下は検出された柱穴の計測値である。

Tab. 4 柱穴計測値 (cm)

	長径×短径 深さ				長径×短径 深さ				長径×短径 深さ						
P 1	3 7	3 6	5 8	P 2	3 8	3 1	6 3	P 3	4 4	3 2	6 3	P 4	3 3	2 5	5 6

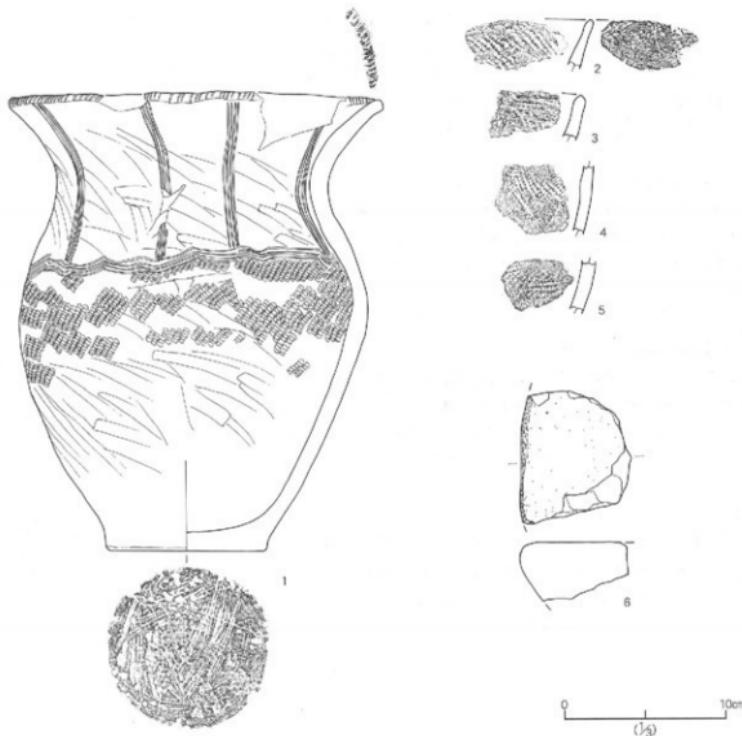
覆土は、最大で3cmしかなく、明瞭な層序を確認することができなかった。

炉跡は住居中央南寄りで検出された。南北に長い楕円形の浅い掘り込みで、規模は南北軸39cm、東西軸31cm。



深さ2cmを測り、底面は被熱赤化していた。

遺物は弥生土器と磨石が床面上から出土している。弥生土器1は口縁部の一部を欠損するもののほぼ完形に近い甕で、住居北西側の床面上で口縁部を上に直立するような状況で検出された。口径22.9cm、器高28.3cm、底径10.0cmを測る。平底の底部から体部は内渦味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反し、平縁口縁を呈する。口唇部と口縁内側に鋭利なヘラ状工具による小刻みな刻目が縦状に入る。この刻目は内側の長さが1cm内外に収まるものの、間隔は無造作である。これは口唇部も同様で、縦位であり、斜めである。さらに刻みの深度も浅いものもあり、深いものもあるなど比較的の雑である。また口唇下部から頸部にかけて幅8mmで4本一組の櫛歯状工具による縦走文と肩部にも同一と推定される工具による波状区画文を周回させる。肩部から胴部上部には単節L R 繩文を横位施文させる。縄文施文後斜行するヘラケズリおよびヘラナデによる整形を施す。底部周囲はヨコナデ、底面もヘラナデによる整形である。胎土に金雲母、海綿骨針を含む。なお、外面胴部上半部および口縁部上部にはスヌの付着が認められる。そのほか覆土中から小破片であるが、いずれも縄文施文の破片が検出されている。2・3は口縁部破片。2は壺と推定される。口縁部外面および内側に単節L R 繩文を縦位施文している。3は口縁部外面と口唇部にやはり単節L R 繩文縦位施文している。4・5は胴部破片。4は単節R L 繩文、5は単節L R 繩文施文であ



第13図 住居跡S 103出土遺物

る。6は砂岩製の磨石の破片である。床面上より出土。明瞭な磨面は確認できない。長さ8.21cm、幅6.832cm、厚さ3.712cm、重さ281gを測る。弥生時代後期末葉に比定される。

## 第2項 土坑

土坑は4基検出された。縄文時代に比定される土坑1基を除き、3基は覆土の状況から判断して、いずれも近世以降の畑地耕作に伴う遺構と思われる。

### 1) 土坑SK01（第14図）

調査区の南側に位置する。形態は確認面で稍円形であるが、底面は長方形を呈している。規模は上面長軸にあたる南北軸で2.38m、東西軸1.26m。下底部で長軸1.90m、短軸で0.72m。深さ2.06mを測る。主軸方位はN-6°-Wを指す。掘形の壁面は底面から垂直気味に立ち上がり、上半部からわずかに抜がり外傾する。底面は起伏もなく、ほぼ平坦である。

覆土は7層に分層でき、上層の1層から6層は急傾斜で複雑な堆積しているものの、中層から下層は单一の堆積を示す自然堆積である。上層である1層はローム粒子を多く含む褐色土。2層はローム粒子をわずかに含む黒褐色土。3層はローム粒子をわずかに含む明黄褐色土。4層はローム粒子・ロームブロックを多く含む褐色土。5層はローム粒子、ロームブロックを多く含む黄橙色土。6層はローム粒子を多く含むにぶい黄褐色土。下層で一揆に埋没した明黄褐色土で、ローム粒子・ロームブロックを多量に含み、硬く締りがある。遺物として縄文土器2片が6層下部から出土した。いずれも縄文時代前期中葉・黒浜式土器である。1は深鉢の胴部破片。単縁LR縄文横位施文で、胎土に多量の纖維を含む。2は付加条縄文が施文されたもので、胎土に纖維を含む。

### 2) 土坑SK02（第14図）

調査区の中央に位置する。形態は円形を呈し、規模は確認面である上面長軸にあたる南北軸で0.73m、東西軸0.70m。下底部で南北軸0.49m、東西軸で0.52m。深さ0.31mを測る。壁面は直線的に外傾して立ち上がり、底面は起伏もなく、ほぼ平坦である。覆土は褐色土(10YR4/4)の單一層で、締りがなく、粘性に欠ける。遺物は出土しなかった。近世以降の畑地耕作土坑である。

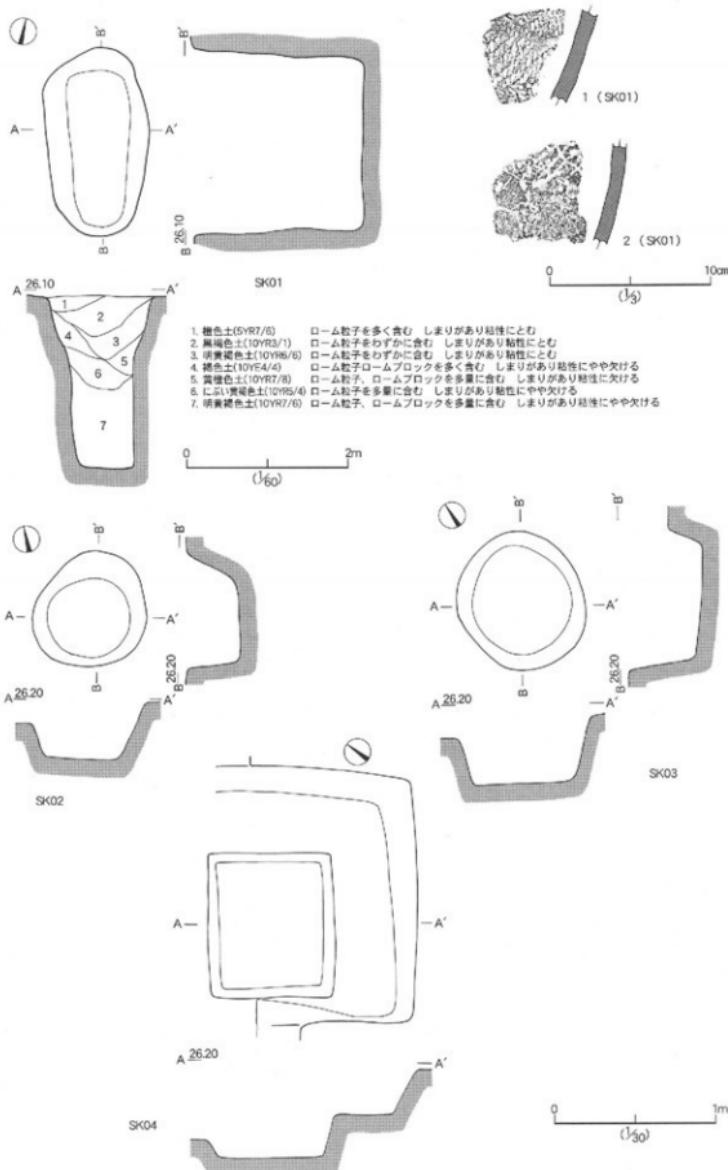
### 3) 土坑SK03（第14図）

調査区の北西側に位置する。形態は南北に長い稍円形を呈し、規模は確認面である上面長軸にあたる南北軸で0.84m、東西軸0.80m。下底部で南北軸0.68m、東西軸で0.60m。深さ0.40mを測る。壁面は直線的に外傾して立ち上がり、底面は起伏もなく、ほぼ平坦である。覆土は褐色土(10YR4/4)の單一層で、締りがなく、粘性に欠ける。遺物は出土しなかった。近世以降の畑地耕作土坑である。

### 4) 土坑SK04（第14図）

調査区の北西隅に位置する。形態は方形を呈し、規模は確認面である南北軸で0.77m、東西軸0.87m。下底部で南北軸0.63m、東西軸で0.77m。深さ0.27mを測る。壁面は直線的に外傾して立ち上がり、底面は起伏もなく、ほぼ平坦である。覆土は褐色土(10YR4/4)の單一層で、締りがなく、粘性に欠ける。遺物は出土しなかった。近世以降の畑地耕作土坑である。

(小川和博)



第14図 土坑SK01、02、03、04実測図及びSK01出土遺

## 第二章 まとめ

### 1. はじめに

下ノ内遺跡は常総台地北東部、通称稻敷台地上に立地している。霞ヶ浦までは直線距離にして6.5kmで、南側に小野川が流れ、北側は小野川の支流にある沼里川によって開拓された比較的幅狭い支谷に面した標高26mの台地上に形成された縄文時代から古墳時代の集落跡である。調査の結果、縄文時代の土坑1基、弥生時代の住居跡1軒、古墳時代の住居跡2軒、近世以降の土坑3基が検出された。また縄文土坑と弥生・古墳時代の住居跡から遺物の出土があった。まず縄文土坑SK01から前期の土器片が出土し、弥生時代の住居跡S I 03からはほぼ完形に近い斐形土器が床面上より出土した。新たなタイプの土器と理解した。なお、古墳時代も充実している。中期前半とした住居跡S I 02からは小形壺や高杯、石製模造品、土玉など比較的まとまった資料を提供している。さらに後期の住居跡S I 01でも須恵器・鏡をはじめ、滑石製錦車の未製品の出土がある。ここでもう一度検出された成果を概観し、特徴的な遺構・遺物についてまとめておきたい。

#### 1) 縄文時代

土坑SK01とした縄文時代前期中葉・黒浜期の土坑1基が検出された。長軸2.38m、短軸1.26m、深さ2.06mを測り、縄文土坑としては遺存状況が良好であった。形態からみるといわゆる「竪穴」状を呈している。とくに上面における形状から判断すると竪穴とすることに異存はないが、掘形をみた場合、確認面から深さ2mを越え、底面はほぼ平坦で、そこからほぼ垂直気味に立ち上がる壁面は竪穴とするよりも貯蔵機能を備えた土坑と考えられる。確かに貯蔵用土坑の場合多くは円形を基本とする。これは同じように深度が2mを越える戸井状の深い土坑も円形が大半を占める。しかし、こうした本例のように長方形もしくは楕円形土坑も貯蔵用土坑としてよいであろう。因みに本跡の北側低位面に形成された根崎遺跡でも前期の土器がまとまって出土しており、明確な住居跡は確認されなかったが、本跡は恒常的な生活の場、拠点的集落のひとつであったと理解したい。

#### 2) 弥生時代

調査区南西側の住居跡S I 03とした台形を呈する4本柱住居跡である。覆土の大半が擾乱を受け、規模すら明確にできないものと諦めていた住居跡である。しかし、壁以外の床面、火跡、柱穴の遺存状況は良好で、住居跡を把握するには十分な情報を提供している。また住居北西側からほぼ完形で特徴的な斐形土器が出土した。

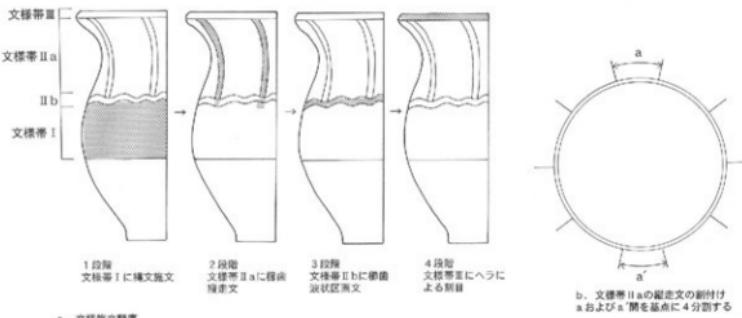
この土器は口径22.9cm、器高28.3cm、底径10.0cm、最大径が胴部上位に位置し21.2cmを測る。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はゆるく外反し、平縁口縁を呈する。文様は縄文と櫛搔文により構成されている。さらに文様帶も明瞭である口唇部の刻日、頸部から口縁部の櫛痕による縦走文、胴部上半部の縄文帯と櫛痕による区画文に分帯される。また器面調整が比較的目立つ。とくに口縁部は横方向のヘラナデ。胴部は斜行するヘラケズリとヘラナデが施され、底部周縁はヨコナデされている。施文順序は縄文施文→櫛痕縦走文→櫛痕波状区画文→口唇部刻目文→口縁内側刻目で、胴部では縄文施文の後、ヘラケズリもしくはヘラナデが施されている。まず縄文は単節L Rの横位施文である。縄文帯が3~7.5cmと帶幅に明確な区画がないが、これは縄文帯下端でヘラケズリ調整されているためである。つづいて口唇下部から頸部にかけて幅8mmで4本一組の櫛状工具による縦走文が計10本入れられる。4.5~7cmと間隔を開けているものの、第15図bでみるように対峙する4.5cmの幅狭間(a-a')に左右6~7cm間隔で3本ずつ入れたものであろう。さらに縦走文と同一工具により雑な波状区画文を頸部に周回させる。最後に口唇部と口縁内側に鋭利なヘラ状工具による小刻みな刻目が縦状に入る。この刻目は口縁内側の幅が1cm内外に収まるものの、間隔は無造作である。これは口唇部も同様縦位や斜め施文で、さらに刻みの深度も比較的雑である。この刻目は口唇部を刻んだ後、口縁内側に施されている。底面はヘラナデによる整形で、胎土に金雲母、海綿骨針を含む。また、外面胴部上半部および口縁部上部にはススの付着が帶状に認められ、煮炊に使用されたと判断することができる。

以上が本土器において肉眼観察できる器面状況であるが、櫛描文を駆使していることから少なくとも弥生土器であることに異論がない。しかし、時期の細別となると問題の多い土器であることが判明した。当初単純に弥生中期末もしくは後期前葉とみていたことについて、小玉秀成氏(玉里村立史料館)によりさまざまな矛盾点が指摘された。氏の要点をまとめてみると『①櫛歯の器面の入り込みが浅いこと。これは後期前半の櫛描文は深くしっかり入れてある。②区画文の施文原理が通常の弥生後期(中期を含む)土器から逸脱していること。これは施文順序が逆転しており、肩部区画文が後から入れていることで、施文原理が崩れていることから後出的である。③口縁内側の刻目について、後期末の東海系土器には口縁内側に縄文を施文するタイプのものがあり、その影響であろう』といいう鋭い指摘であった。とくに②の施文順序が崩れていること、さらに③の口縁内側施文については、整理過程において、小破片であるが口縁内側に縄文施文の土器が確認されたことから、小玉氏の指摘のとおり本土器は後期終末に近い時期を提示したい。しかし、氏は同時に櫛描文が後期終末まで残る最大の矛盾点もあり中期末から後期前葉の可能性もあることを挙げている。ここでは決定的な時期判断が不可能ではあるが、小玉氏の指摘された櫛描文の施文順序の逆転(縦走文→横区画文)および口唇部・口縁内側の刻目といった特徴ある施文技法から新たな型式として「下ノ内式」を提唱しておきたい。さらに「櫛描文の終焉」段階の土器として認識し、今後のその類例を待ち、より確実な年代を与えることを期待して、新型式名の設定とともに問題提起しておきたい。

### 3 古墳時代

住居跡 S 102は中期・5世紀前葉に比定される。一辺 8m を超え、大型住居に分類することができる。ここから土師器、石質模造品、土玉が出土した。とくに土師器については特徴的な様相を呈する器種である小形壙と高壙が比較的まとまっている。これらの出土状況をみると壙が住居跡東コーナーの貯蔵穴 2 の周辺に 5 個体(1・3・4~6)が、また高壙が南コーナーの貯蔵穴 3 の周辺に 4 個体(9・10・15・16)の他に貯蔵穴内一括として 13・14 がまとまって出土した。さらに土玉は西壁廻中央に集中していた。これらはほぼ床面上もしくは貯蔵穴内の出土であり、一括廃棄されたものではなく、遺棄されたものと推定される。これを改めて観察すると東壁近傍には鉢や甕なども含めた土器類の置き場であり、とくに供膳に使用された土器である壙が住居北側に、高壙が住居南側に置き場があったとみることができる。また反対の西壁近中央に土玉が集中したことから、土玉の置く位置が定まっていたことを示している。おそらく紐などに通してまとめてあったものか、あるいは綱や袋の中に入れていたものが残ったものであろう。こうした住居内の遺物のまとまりから置き場の位置が確定でき、そこに住居の利用空間が明瞭に分けられていたことが読み取れる。

さて、上記の供膳用土器のひとつに特徴的な小形壙がある。ここでは実測可能な 6 個体についてまとめておきたい。いずれも同時期の遺物として判断してよいであろう。しかし、器形はもちろん、胎土や作り方に大きな相違は



第15図 「下ノ内式」土器の施文順序と文様割付

なく、むしろ齊一性の強い器種であるとはいえる。個々を観察するとそのバラツキが目立つ。報文中では器形の特徴としていずれも体部は球形もしくは扁平球形を呈し、口縁部は外傾して立ち上がり、器面調整も口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデの後、ヘラケズリを加えるといった、共通する調整技法を表した。しかし、形態とくに、口縁部と体部の法量に個体差があることを指摘している。第10図の番号1は小形で器高が8.5cmである。底部はヘラケズリによって平底状に成形している。番号2・3は明瞭な平底を呈し、とくに3は上げ底状に窪む。番号4・5の底部はヘラケズリにより丸底状に成形している。番号6は小形壺形で、比較的短い口縁部をもち、体部も胴長である。

そこでもう一度器形について触れておきたい。ここでは「平城宮発掘調査報告X 奈良国立文化財研究所学報第三十九冊」(奈良国立文化財研究所1981)で実施された小形丸底壺の計測方法を採用してみたい。まず同様の法量計測方法として口縁部の外傾角度がある。ここでも下記の一覧表に示したとおり、 $54^\circ \sim 66^\circ$  の約 $10^\circ$ の範囲内に収まることが判明した。また口径と体部最大径の比率が0.90~1.14と1.0前後であることから大きな差がないことが判る。これは口径と体部径に差がなく最大径の位置がほぼ同じであることを意味している。ただし番号3の比率が高いのは復元実測の影響であり、あくまでも推定数値であることに起因している。また口縁部の高さと体部の高さの比率については、番号4・6以外0.60~0.63の範囲内であり共通しており、これは体部の高さが口縁部よりも高いことを示している。さらに番号4・6はさらに口縁部が短いことを表している。とくに番号6は小形壺といつてもよいほど別器種として分類してよいであろう。ここでまとめてみると①最大径の比率に差がないことから最大径の位置が口縁部と体部にある。②いずれも口縁部の高さに対して、体部の高さが高い番号で、壺形土器の後出の様相を呈している。

(小川和博)

Tab. 5 住居跡S I 02出土壺形土器法量

番号	口縁外傾角度	口径(a)	体部径(b)	$a/b$	口縁部高(A)	体部高(B)	$A/B$
番号1	$62^\circ$	7.6	7.5	0.986	3.2	5.3	0.60
番号2	$63^\circ$	8.7	8.9	1.02	3.8	6.2	0.61
番号3	$54^\circ$	9.4	8.5	0.90	3.5	5.7	0.61
番号4	$55^\circ$	10.0	9.8	0.98	3.4	6.8	0.50
番号5	$66^\circ$	9.0	9.9	1.10	3.8	6.0	0.63
番号6	$57^\circ$	8.8	10.0	1.14	2.7	8.1	0.33



第16図 住居跡S I 02出土壺形土器法量 (番号は第10図の遺物番号と一致する)

## 参考文献

奈良国立文化財研究所1981「平城宮発掘調査報告X」奈良国立文化財研究所学報第39冊

## 付章 遺物観察表 住居跡 S101、02出土

住居跡 S101出土遺物観察表(第6図)

番号	種別	面種	口径	縦高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	12.40	4.00	石英・長石粒を含む	灰色SY6/1	良好	クロコ成形。外面部手持ちへラケズリ。	床面	口縫部欠損
2	土師器	甕	13.80	(3.30)	(8.00)	石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部側位のヘラケズリ。内面ナナデ。	覆土	口縫部 1/8残存
3	土師器	甕	14.00	(3.10)	(6.00)	雲母・石英・長石粒を含む	10YR5/4 にぶい黄褐色	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部側位のヘラケズリ。内面ナナデ。	覆土	口縫部 1/8残存
4	土師器	高杯	-	(5.70)	-	石英・長石粒を含む	10YR7/3 橙色7.5YR7/6	良好	外面部ヘラカギ。脚部底位のヘラケズリ。内面底部ヘラナナデ。脚部シボリ。	覆土	口縫部・側部 欠損
5	土師器	甕	13.00	(6.00)	-	石英・長石・黒色粒子を含む	明赤褐色 2.5YR5/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部側位のヘラケズリ。内面縫部ナナデ。体部ヘラナナデ。	覆土	口縫部 1/2残存
6	土師器	甕	14.60	(7.20)	-	石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色 10YR6/4	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部側位のヘラケズリ。内面縫部ナナデ。体部ヘラナナデ。	覆土	口縫部破片
7	土師器	甕	-	(3.30)	8.00	石英・長石粒を含む	にぶい黄褐色 10YR5/6	良好	体部側位のヘラナナデ。内面ヘラナナデ。底部ヘラナナデ。	覆土	底部1/4残存
8	土師器	甕	-	(2.50)	9.00	石英・長石粒を含む	明赤褐色 2.5YR5/6	良好	体部側位のヘラナナデ。内面ヘラナナデ。底部ヘラナナデ。	覆土	底部1/4残存

住居跡 S102出土遺物観察表(第10-11図)

番号	種別	長さ	高さ	孔径	重量(g)	色調	特徴	出土位置	備考
9	輪郭車	3.55	1.83	--	36.10	暗緑灰色5G4/1	輪石製。切削鋸歯	床面	
10	土玉	3.46	3.49	0.81	32.68	浅緑褐色10YR8/4	球形、孔部円形。ナデ盤形、孔部曲取り盤形	床面	
11	土玉	3.44	3.32	0.61	29.58	浅緑褐色10YR8/4	球形、孔部円形。ナデ盤形、孔部曲取り盤形	床面	
12	土玉	3.31	3.26	0.82	27.36	黑褐色7.5YR3/1	球形、孔部円形。ナデ盤形	床面	

番号	種別	面種	口径	縦高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	埋	7.60	8.50	4.20	石英・長石粒を含む	橙色SYR6/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラケズリ。体部ヘラナナデ。内面口縫部ナナデ。体部テナ。	床面	口縫部1/3欠損。底部穿孔
2	土師器	埋	8.70	10.00	4.00	海綿骨質・石英・長石粒を含む	にぶい褐色 7.5YR5/3	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラケズリ。体部ヘラケズリ。内面口縫部ヨコナギ。体部テナ。	床面	完存
3	土師器	埋	9.40	(5.30)	3.20	石英・長石・チャート粒を含む	にぶい褐色 7.5YR6/4 黒褐色7.5YR3/1	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラケズリ。体部ヘラナナデ。内面口縫部ヨコナギ。体部テナ。	床面	口縫部欠損
4	土師器	埋	10.00	10.20	2.00	石英・長石粒を含む	褐色SYR6/6 黒褐色7.5YR3/1	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部ヘラナナデ。底部ヘラケズリ。内面口縫部ヨコナギ。体部テナ。	貯蔵穴2	口縫部1/3欠損
5	土師器	埋	9.00	9.80	4.00	石英・長石粒を含む	黒褐色 7.5YR3/1	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラケズリ。内面口縫部ヨコナギ。体部テナ。	床面	完存
6	土師器	埋	8.80	10.00	3.80	石英・長石粒を含む	灰褐色	良好	外面部縫部ヨコナギ。体部ヘラナナデ。ヘラケズリ。内面口縫部ヨコナギ。体部テナ。	貯蔵穴2	完存
7	土師器	埋	13.50	(4.60)	-	海綿骨質・石英・長石粒を含む	褐色SYR6/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラケズリ。内面口縫部ヨコナギ。	貯蔵穴3	口縫部1/4残存
8	土師器	鉢	14.40	5.80	7.20	石英・長石・黒色粒子を含む	にぶい褐色 7.5YR7/4	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラナナデ。内面口縫部ヨコナギ。体部ヘラナナデ。底面軋出瓦砾	床面	口縫部一部 欠損
9	土師器	高杯	20.00	19.30	15.60	石英・長石・黒色粒子を含む	淡紫褐色 7.5YR8/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。脚部ヘラミガキ。ヘラナナデ。内面軋出瓦砾。脚部ヘラナナデ。	床面	口縫部3/4 欠損
10	土師器	高杯	18.40	13.00	13.60	石英・長石・黒色粒子を含む	褐色SYR6/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。脚部ヘラミガキ。ヘラナナデ。内面軋出瓦砾。脚部ヘラナナデ。	床面	口縫部2/3 欠損・脚部 一部残存
11	土師器	高杯	18.00	(6.30)	-	石英・長石・チャート粒を含む	赤褐色SYR4/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラナナデ。内面軋出瓦砾。脚部ヘラナナデ。	貯蔵穴2	脚部2/3残存
12	土師器	高杯	18.00	(5.80)	-	石英・長石・黒色粒子を含む	褐色SYR6/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。ヘラナナデ。内面軋出瓦砾。脚部ヘラナナデ。	貯蔵穴1	脚部2/3 欠損・脚部 一部残存
13	土師器	高杯	18.00	(3.00)	-	石英・長石・黒色粒子を含む	褐色7.5YR7/6	良好	外面部縫部ヨコナギ。内面口縫部ヨコナギ。	貯蔵穴3	口縫部1/4 欠損
14	土師器	高杯	-	(3.70)	-	石英・長石・黒色粒子を含む	褐色7.5YR6/6	良好	外面部縫部ヘラナナデ。ヘラケズリ。内面軋出瓦砾。	貯蔵穴3	口縫部・脚部 欠損
15	土師器	高杯	-	(7.30)	-	石英・長石・黒色粒子を含む	にぶい褐色 7.5YR7/4	良好	外面部縫部ヘラケズリ。内面縫部シボリ。	貯蔵穴3	脚部残存

番号	種別	型様	口径	調高	底様	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
16	土師器	高杯	—	(8.49)	—	石英・長石・黒色粒子を含む	褐色7.5YR6/6	良好	外面部ハラケズリ、内面部シボリ。	床面	脚底残存
17	土師器	小型甕	12.60	12.00	5.20	石英・長石・黒色粒子を含む	にじい黄褐色 10YR6/4	良好	外面部口部コナデ、内面部コナデ。	西壁集中	充分品
18	土師器	甕	17.00	(5.70)	—	石英・長石を含む	褐色5YR6/8	良好	外面部口部コナデ、ハラケズリ。体部ハラケズリ、内面部口部コナデ。	野鹿穴3	口段部1/8残作
19	土師器	甕	15.69	28.60	5.80	石英・長石・チャートを含む	にじい黄褐色 10YR7/3 黒色5YR2/1	良好	外面部口部コナデ、体部ハラケズリ。内面部口部コナデ。	床面	口段部2/3残・体部1/3残・底部残
20	土師器	甕	—	(16.00)	8.20	石英・長石を含む	にじい褐色 7.5YR6/4	良好	外面部ハラケズリ。内面部ハラナデ。	野鹿穴1	底部残存、外面部スリッシュ
21	土師器	甕	—	(10.50)	68.00	石英・長石・チャートを含む	にじい褐色 7.5YR5/4	良好	外面部ハラケズリ、内面部ハラナデ、ハラケズリ。	床面	底部1/4残存
22	土師器	甕	—	(6.10)	6.60	石英・長石・黒色粒子・スコリアを含む	褐色7.5YR6/6	良好	外面部ハラケズリ、内面部ハラナデ。	床面	底部残存
番号	種別	長さ	高さ	孔径	重量(g)	色調	特徴			出土位置	備考
23	瓦孔円盤	2.3	2.51	0.17	2.38	緑褐色5 G 6/1	円形、両面および側縁に仕上げ研磨。			床面	
24	手摺土器	4.20	2.10	—	9.14	褐色7.5YR4/6	輪郭によるナデ			床面	口段部1/4残
25	土玉	3.36	3.45	0.75	34.70	黒褐色7.5YR3/1	球形、丸部円形、ナデ整形、孔部曲取り鑿形			西壁集中	
26	土玉	3.46	3.50	0.71	32.58	淡黃褐色10YR8/4	縦長球形、孔部円形、ナデ整形			西壁集中	
27	土玉	3.11	3.26	0.88	26.18	黒褐色7.5YR3/1	球形、孔部円形、ナデ整形			野鹿穴2	
28	土玉	3.12	3.17	0.78	32.46	淡黃褐色10YR8/4	球形、孔部円形、ナデ整形			西壁集中	
29	土玉	3.19	2.81	0.94	20.68	黒褐色7.5YR3/1	球形、孔部構造形、ナデ整形			西壁集中	
30	土玉	3.20	3.15	0.98	24.46	暗褐色7.5YR3/3	球形、孔部円形、ナデ整形			西壁集中	
31	土玉	2.90	3.01	0.94	23.44	黒褐色7.5YR3/1	球形、孔部構造形、ナデ整形			床面	
32	土玉	2.83	3.01	0.81	21.18	黒褐色7.5YR3/1	球形、孔部円形、ナデ整形			西壁集中	
33	土玉	2.98	2.93	1.03	21.10	黒褐色7.5YR2/1	球形、孔部やや大きめの円形、ナデ整形			西壁集中	
34	土玉	3.10	3.06	1.02	24.94	黒褐色7.5YR3/1	球形、孔部やや大きめの円形、ナデ整形			西壁集中	

# 写 真 図 版



1 下ノ内遺跡遠景  
(東から)



2 下ノ内遺跡調査前  
(西から)



3 下ノ内遺跡全景  
(西から)



1 住居跡 S I 01全景  
(南から)



2 住居跡 S I 01カマド  
(南から)



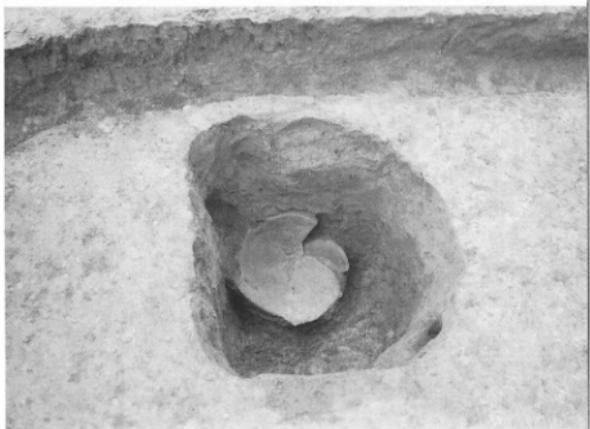
3 住居跡 S I 01遺物出土状況  
(南から)



1 住居跡 S 102全景  
(北西から)



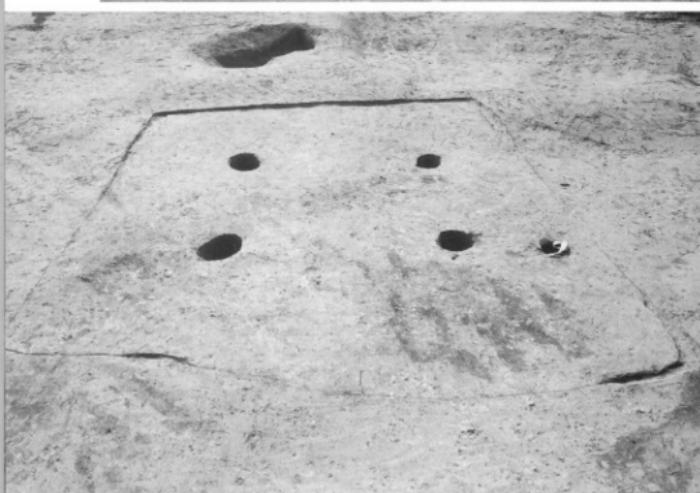
2 住居跡 S 102遺物出土状況  
(南から)



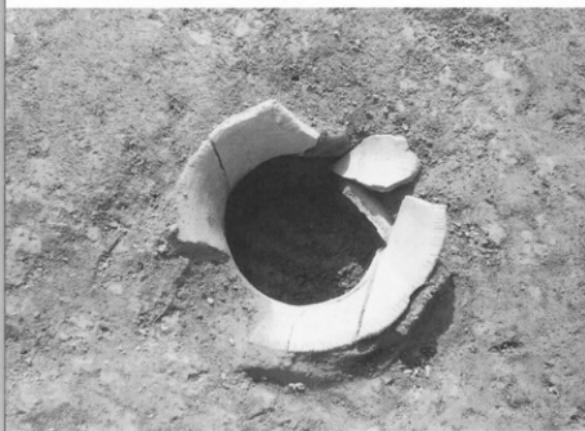
3 住居跡 S 102貯蔵穴 1  
(南から)



1 住居跡 S I 02貯蔵穴 2  
(南から)



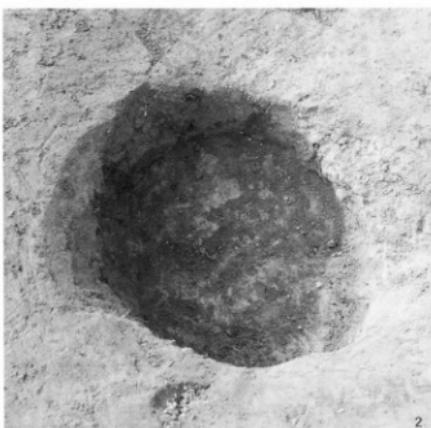
2 住居跡 S I 03全景  
(南から)



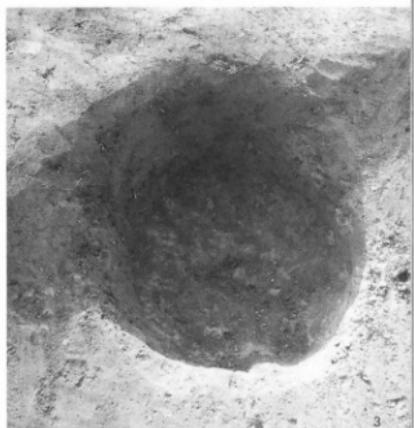
3 住居跡 S I 03遺物出土状況



1 土坑SK01全景  
(南から)



2



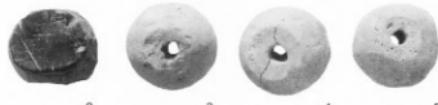
3

2 土坑SK02全景  
(東から)

3 土坑SK03全景  
(東から)

4 土坑SK04全景  
(北西から)





2 3 4 5

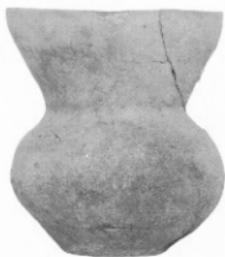
1~5 住居跡S101出土遺物

6~11 住居跡S102出土遺物

1



6



7



8



9



10



11



1

2

3



4

5



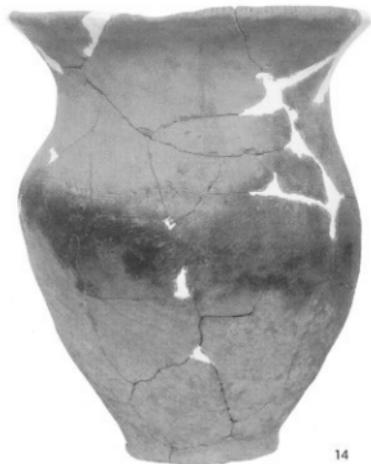
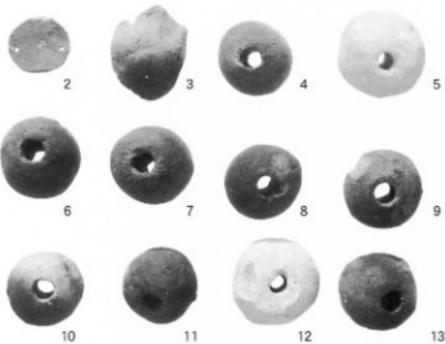
6

7

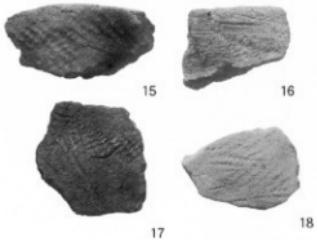
1~7 住居跡 S 102出土遺物



1



14



18



19



20



21

1~13 住居跡S I 02出土遺物

14~19 住居跡S I 03出土遺物

20・21 土坑S K01出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	しものうちいせき							
書名	下ノ内遺跡							
副書名								
巻次	船橋市埋蔵文化財調査報告書第2集							
シリーズ名								
編著者名	小川和博							
編集機関	有限会社日考研茨城							
所在地	〒330-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1 TEL.029-892-1112							
発行機関	稲敷市教育委員会							
所在地	〒300-1492 茨城県稲敷市柴崎7427番地 TEL.029-892-2000(代)							
発行年月日	2006年3月31日							
レコード 収録遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しものうちいせき 下ノ内遺跡	茨城県稲敷市蒲ヶ山 字根崎1148-3	441	164	35度 57分 07秒	140度 17分 09秒	2005.10.17 ~ 2005.11.04	1,200m <sup>2</sup>	山砂採取に伴う事前 調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
下ノ内遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代	堅穴住居跡 土坑	3軒 4基		土器(縄文土器・弥生 土器・土師器・須恵器) 石製品(石製模造品・ 初鍛車輪製品・磨石) 土製品(手捏土器・土 糞)		弥生時代・古墳 時代中・後期の 集落跡である。 とくに弥生時代 の住居跡から時 期の確定できな い土器が出土し 「下ノ内式」と 命名する。

## 下ノ内遺跡発掘調査報告書

平成18年(2006)3月20日 印刷

平成18年(2006)3月31日 発行

発行	福島市教育委員会 茨城県福島市柴崎7427番地	TEL 029-892-2000
編集	福島市教育委員会 有限会社 日考研茨城 茨城県福島市佐倉3321-1	TEL 029-892-1112
印刷	有限会社 田辺印刷 茨城県福島市佐倉3321-5	